報　告

保育所における気になる子どもの特徴と保育上の問題点に関する調査研究

池田　友美[1)]，郷間　英世[2)]，川崎　友絵[3)]
山崎　千裕[4)]，武藤　葉子[5)]，尾川　瑞季[6)]
永井利三郎[7)]，牛尾　禮子[1)]

〔論文要旨〕

A県の公立および私立保育所の保育士を対象に2003年から2005年度に実施された研修会において『気になる子ども』に関する質問紙調査を実施した。その結果，保育所勤務5年以上の124名から回答を得られ，『気になる子ども』について問題や悩みがあると回答したものは85名（68.5%）であった。『気になる子ども』のもつ問題からその特徴をあげると，ことば・コミュニケーションに関する問題が多く，行動に関するもの，社会性・対人関係に関するものと続き，『気になる子ども』は軽度発達障害の特徴をもっていると思われた。また，『気になる子ども』，話を聞けない子ども，多動な子ども，きれやすい子どもが保育所において以前と比べて増えたと回答した保育者は過半数を超えており，その回答は年々増加した。以上から，軽度発達障害の特徴をもつ『気になる子ども』が増えていると感じている保育者が数多く存在し，しかも増えてきており，継続して保育者を支援できるシステム作りが早急な課題であることが示唆された。

Key words：保育所，気になる子ども，質問紙調査，軽度発達障害

Ⅰ．はじめに

障害児の統合保育が制度化されて20年余りが経ち，「インテグレーションからインクルージョンへ」[1)]という流れの中で，現在，保育所や幼稚園にはさまざまなタイプの子どもが通っている。保育所や幼稚園での統合教育は，障害児にとっても健常児にとっても発達や行動によい影響をもたらすという報告は多数ある[1)2)]。しかしながら，筆者らの行っている療育機関での発達相談の場では，最近特に，保育を担当している保育士から障害児を指導するうえでのさまざまな困難点とともに，「最近の子どもの気になる様子」や「保育の困難さ」についての体験がよく語られる。

本郷ら[3)]は調査時点では何らかの障害がある

Surveillance Study on Children with Special Needs in Nursery Schools　〔1920〕
受付 07．4．5
採用 07．9．6

Tomomi IKEDA，Hideyo GOMA，Tomoe KAWASAKI，Chihiro YAMAZAKI，Yoko MUTO，Mizuki OGAWA，Toshisaburou NAGAI，Reiko USHIO
1）兵庫大学健康科学部看護学科（研究職/看護師）
2）奈良教育大学教育実践開発講座特別支援教育（研究職/小児科医）
3）吉備国際大学大学院（大学院生/看護師）
4）京都第一赤十字病院（心理職）
5）奈良教育大学特別支援教育研究センター（その他）
6）川西市教育委員会（心理職）
7）大阪大学医学系研究科保健学専攻（研究職/小児科医）
別刷請求先：池田友美　兵庫大学健康科学部看護学科　〒675-0195 兵庫県加古川市平岡町新在家2301
Tel/Fax：079-427-9513

Presented by Medical*Online

とは認定されていないが，保育者にとって保育が難しいと考えられている『気になる子ども』を81ヶ所の保育所を対象に調査した結果，回答のあった61保育所のうち，3ヶ所の保育所だけが，「該当者」なしであり，ほとんどの保育施設で『気になる子ども』が在籍していたと報告している。また，平澤ら[4]は，8割前後の幼稚園や保育所に「気になる・困っている」子どもが存在している，としている。このように，保育現場には『気になる子ども』が多数在籍し「保育の難しさ」と『気になる子ども』には関係があることが示されている。

平澤ら[4]は143ヶ所の保育所・園の全在籍児17,464名のうち「気になる・困っている行動」を示す子どもが782名（4.5%）おり，そのうち18.0%が知的障害のある子どもで，6.1%が知的障害以外の自閉症，ADHD，LDと回答された子どもであり，残りの75.8%が診断のない『気になる子ども』であったと報告している。障害児を含めた『気になる子ども』に関しては，中村ら[5]は，幼稚園，保育園（所）196施設のうち117施設（59.7%）で落ち着きのない子どもが在籍しており，こうした子どものうち36人（21.6%）が診断を受けているとしている。文部科学省[6]は，ADHD，LD，高機能自閉症のため学習や生活について特別な支援を必要とする子どものうち，小中学校の通常学級に在籍している児童生徒は6.3%程度の割合でいると報告しているが，学習障害や軽度発達遅滞などではその障害の顕在化が学齢期以後であることが多く，乳幼児期における早期発見が困難な状況にあるため，学童期以前の軽度発達障害児の実数の把握は困難な状況である。

しかし，先行文献[4)5)]からは，軽度発達障害児の中に『気になる子ども』と捉えられている子どもが含まれていることが示唆されている。そこで『気になる子ども』の特徴を保育園の保育者を通して検討し，『気になる子ども』の保育をすすめるうえでどんな問題があるのか，またそのような『気になる子ども』が以前と比べて増加しているのかを明らかにすることを目的とし調査を行った。

Ⅱ．研究方法

1．対　象

A県の公立および私立保育所の職員で，2003から2005年度の保育士対象の研修会に参加した保育士221名のうち，保育所勤務5年以上の保育士164名に対して質問紙による調査を行った。そのうち，欠損値のある回答を除いた124通（2003年度21通，2004年度55通，2005年度48通）を分析の対象とした。

2．調査方法

研修会の際に保育士に自記式質問紙を配布し，研修会終了後に研修会主催者に回収を依頼した。後日，調査票は研修会主催者が質問紙の回答の有無にかかわらず，封筒にまとめて返送する形式で回収した。倫理的配慮として，調査に参加しなくても不利益のないこと，プライバシーは厳守されることを口頭で説明した。

調査内容は，最近の保育所の子どもたちの様子と保育の問題点についてであり，まず，『気になる子ども』の保育をするうえでの問題点について選択肢および自由記述で回答を求めた。続いて，1）多動な子ども，2）集団の場で保育士（先生）の話を聞けない子ども，3）きれやすい子ども，4）友だちと遊べない子ども，5）『気になる子ども』などが以前と比べて増えているかを質問し，どのようなことでそう感じるのか，その理由を自由記述で回答を求めた。なお，従来の研究においては『気になる子ども』の定義は必ずしも一定ではない。そこで，本研究では，『気になる子ども』を以下のように定めて研究をすすめた。すなわち，調査時点では何らかの障害があるとは診断をされていないが，保育者にとって保育が難しいと考えられている子どもとした。

3．分析方法

『気になる子ども』の保育をするうえでの問題点の自由記述は，平澤ら[4]が分類した「気になる・困っている行動」に関する行動目録を参考に内容ごとに分類した。内容の妥当性・信頼性を確保するために研究者間で検討，確認した。統計的手法にはχ^2乗検定を用いた。

Presented by Medical*Online

Ⅲ．結　　果

1．『気になる子ども』を保育するうえでの問題や悩み

『気になる子ども』を保育するうえで問題や悩みがあると回答したものは3年間を総計して85名（68.5%）であった。保育上の問題や悩みの自由記述の内容は，回答が多い順に『気になる子ども』のもつ問題，『気になる子ども』の保育上の問題，『気になる子ども』の親との問題，その他に分類された（表1・表2・表3）。『気になる子ども』のもつ問題は，「話が聞けない」，「会話が成立しない」といったことば・コミュニケーションに関する問題，「落ち着きがない」，「ウロウロする」，「反応がない」といった行動に関する問題，「集団に入れない」，「対人関係がとりにくい」といった社会性・対人関係に関する問題などがあげられ，その回答も多かった。『気になる子ども』の保育上の問題としては，「診断を受けていないので関わり方が難しい」，「加配がなく対応しきれない」，「どこまで個性を受け止めて，どこから障害とするかわからない」などがあげられた。『気になる子ども』の親との問題では，「親にどう説明すればいいかわからない」，「親の理解が得られない」などがあげられた。その他の問題としては，「まわりの子どもの偏見」，「たくさんありすぎて思い出すのも困難」などがあげられた。

表1　『気になる子ども』のもつ問題　　【（　）内は回答数】

ことば・コミュニケーションに関する問題（13）	話が聞けない（3） 指示が入らない（3） 会話が成立しない（2） 言葉面で遅い（2） 言ったことがわからず，理解できない 大きい声でしゃべる 怒られて反省した後も繰り返し続けて同じことをする
行動に関する問題（11）	落ち着きがない（3） ウロウロする（3） 部屋を走り回り，じっとしていられない ボーっとしていて，行動しない 呼びかけても反応しない時が多い 1日中騒がしい 衝動性が強い
社会性・対人関係に関する問題（8）	集団生活に入れない（3） 対人関係がとりにくい（2） じっとして遊べない みんなと一緒に体育遊びやゲームなどに参加しない 視線が合わない
情緒に関する問題（6）	自分の思いが通らないとパニックを起こす（2） 気持ちがコントロールできない 泣き叫ぶ 行動の切り替えが難しい すぐにきれて，「死んでやる」など口走る
他児とのトラブルに関する問題（4）	友だちをかむなどの症状がある 友だちとのトラブルが多い 他児に対してもすぐに手が出たり，物を投げたりする 衝動的な行動が多くクラスの友だちにけがをさせた
生活習慣に関する問題（3）	毎回同じことでつまづき，積み上がらない 自然に身につけてほしいことが身につかない（タオルかけ等の準備や片付け） 衣服の着脱ができない
こだわり・癖・常同行動（1）	こだわりがある

Presented by Medical*Online

表2　『気になる子ども』の保育上の問題
【（　）内は回答数】

気になるが診断を受けていない（3）
加配がつけてもらえず，1人担任では対応しきれない（3）
どこまで個性を受け止めて，どこから障害とするかわからない（2）
普通とはちょっと違うがどこに相談をもちかけていいかわからない（2）
自分の判断にまかせられ，どう対応していいか悩む
子どもの行動が理解できない
経験不足か気になる子の境目がわかりにくい
自閉傾向があると言われるが，他機関の方たちの意見も異なっていてはっきりしない
年齢とともにのびる可能性があるので，どの年齢で診断を受ければいいのかわからない

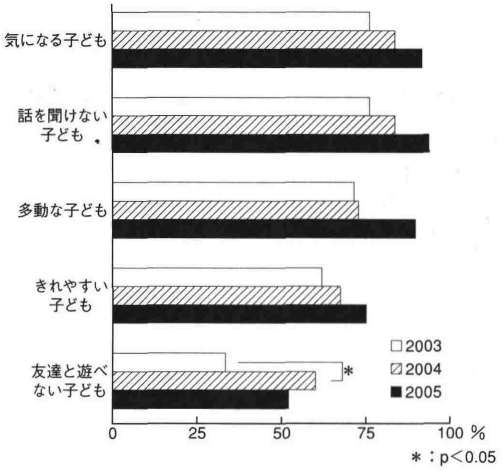

図1　以前と比べて増えたと回答した保育者の年度別割合

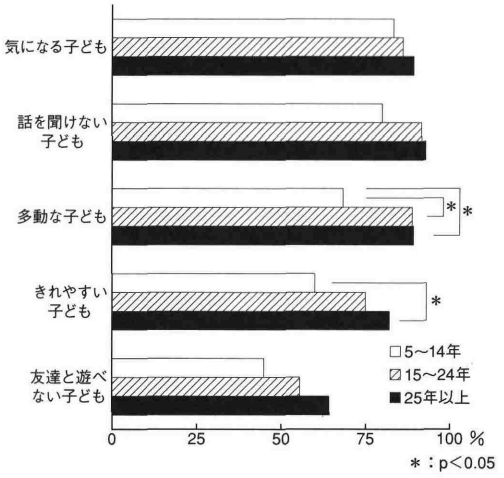

図2　以前と比べて増えたと回答した保育者の経験年数別割合

表3　『気になる子ども』の親との問題
【（　）内は回答数】

子どもの対応について保護者に十分伝えられないことがある（2）
親にも問題がある（2）
親とどう話をすすめていくか困難（2）
親が子どもの様子を「気になる」ととらえてくれない
親との関係作りが難しい
保護者に子どもの現状を伝えるのが難しい
親の理解が得られず，専門機関にかかれない

2．以前と比べて増えている子どもたち

最近の子どもたちの様子で以前と比べて増えたと回答した保育者の割合を年度ごとに図1に示した。また，保育者の経験年数を5年以上14年以下，15年以上24年以下，25年以上に分類して最近の子どもたちの様子で以前と比べて増えたと回答した保育者の割合を図2に示した。

年度ごとに見ると，『気になる子ども』，集団の場で保育士（先生）の話を聞けない子ども，多動な子ども，きれやすい子どもは，いずれの年も以前と比べて増えたと回答した保育者が過半数を超えていた。また，それらの項目では，以前と比べて増えたと回答した保育者が年々増加していたが，各年度で有意差はなかった。2003年，2004年では，『気になる子ども』と集団の場で保育士（先生）の話を聞けない子どもが増えたと回答した保育者が多かったが，2005年は94.1%の保育者が集団の場で保育士(先生)の話を聞けない子どもが増えたと回答しており，「絵本や紙芝居の時でさえも話が聞けず動き回る」，「話は聞けないが自己主張は強い」といった記述が見られた。

保育者の経験年数でみると，すべての項目で経験年数が長いほど以前と比べて増えたと回答した保育者の割合が多かった。経験年数25年以上の保育者では，多動な子ども，きれやすい子どもが以前と比べて増えたと回答した者の割合が5年以上14年以下の保育者に比べて有意に多かった。

Ⅳ．考　　察

1．保育者が感じる『気になる子ども』の特徴と保育の困難性

保育者の『気になる子ども』を保育するうえでの問題や悩みから『気になる子ども』の特徴

Presented by Medical*Online

をあげると，ことば・コミュニケーションに関する問題，行動に関する問題，社会性・対人関係に関する問題，情緒に関する問題，他児とのトラブルに関する問題があげられる。

竹田ら[7]は，高機能広汎性障害の幼児期での特徴として，保育士や教諭の指示に従わない，周囲にあわせて行動しにくい，気に入らないと教室を飛び出す，集団行動がとれず独りで自分の好きな遊び（ミニカー並べ，積み木遊びなど）に没頭する，また，それをほかの子どもにじゃまされたり，先生に叱責されるとパニックに陥り，突然噛んだり叩いたりといった攻撃的な行動をとったり，自傷行動が出現する場合があることをあげている。また，橋本[8]はADHD（注意欠陥多動性障害）の幼児期の行動特徴として，じっとしていない，集団遊びができない，かんしゃくが強い，聞き分けがないことをあげている。今回の調査で明らかになった『気になる子ども』の特徴をあげると，高機能自閉症やADHDの幼児期の特徴と類似する内容が多く，『気になる子ども』は軽度発達障害の特徴をもっていると考えられる。

平澤ら[4]は，「保育者の気になる・困っている行動」の問題として，集団や対人関係に関する複数の行動をあげており，その上位5項目は集団活動に関する問題，ことばに関する問題，動きに関する問題，興奮状態・かんしゃく・情緒不安定，指示に従わないなどであった。本調査でもほぼ同様の結果であり，保育者は集団活動の中での逸脱した子どもの行動に保育の困難性を感じていることがうかがわれた。その他の問題をみると，『気になる子ども』の親との問題があがっている。保育者は，直接の対象である子どもとの関係のみならず，その親との関係においても困難性を感じていることがわかる。根来ら[9]は，発達障害はしばしば「見えない障害」とよばれ，早期対応の重要な機会を逃してしまう場合が少なくなく，保護者は「障害の気づき」と「障害の否定」の間で気持ちが揺れ動くジレンマ状態に陥ってしまうと述べている。ジレンマに陥っている親，障害に気づきのない親，などさまざまな状態にある保護者との関係を築かなければならない保育者の困難性も，保育者支援の観点で重要な課題であることがわかった。

2．保育者が感じる以前と比べて増えている子どもたち

最近の子どもたちの様子では，以前と比べて増えたと回答した保育者が年々増加していた。また，保育者の経験年数が長いほど以前と比べて増えたと回答した保育者も増加していた。『気になる子ども』を保育するうえでの問題や悩みを回答した保育者と調査対象は同じであり，軽度発達障害の特徴をもつ『気になる子ども』が年々増加していると感じる保育者が増加していることを示している。2005年4月に発達障害者支援法が施行され，この法律の中で発達障害を，「自閉症，アスペルガー症候群その他の広汎性発達障害，学習障害，注意欠陥多動性障害，その他これに類する脳機能の障害であって，その症状が通常低年齢において発現するものとして定める」など，社会においても発達障害が認知されつつある。このことも軽度発達障害の特徴をもつ『気になる子ども』が増えていると感じる保育者が増加していることに影響している可能性がある。また，宮本[10]は発達障害の状態が外に表れる表現型を，①遅れ，②偏り，③ゆがみの3つに分類しており，遅れ（delay）を通常母集団で期待される（90%）達成年齢より遅い達成年齢，偏り（deviation）を通常母集団で期待される行動の量・質の幅を超えた行動，ゆがみ（distortion）を通常母集団では見られない行動の反復としている。これまでは集団の中での遅れが障害の認知の主流であったが，偏り，ゆがみをもつ子どもたちが注目されるようになったことも，軽度発達障害の特徴をもつ子どもが増えていると感じる保育者が増加していることと関係があると考えられる。単に軽度発達障害の特徴をもつ『気になる子ども』が増加しているとは断言できないが，保育の現場では軽度発達障害の特徴をもつ『気になる子ども』が増えていると感じている保育者が数多く存在し，しかも増えていることは保育の困難性と深く関わっていることが考えられる。

このように軽度発達障害の特徴をもつ子どもの保育に困難性を感じ，またそのような子どもたちが増えていると感じる保育者を支援するためには，軽度発達障害の正しい理解とその対応方法の普及が不可欠である。気になる子どもの

Presented by Medical*Online

保育上の問題や悩みの中でも，保育者の関わるうえでの問題で「どこから障害とするのかわからない」，「どこに相談をしたらいいのかわからない」等の意見があった。文部科学省は今後の特別支援教育の在り方について（最終報告）[11]の中で，教育，福祉，医療，労働等が一体となって乳幼児期から学校卒業後まで障害のある子どもおよびその保護者等に対する相談および支援を行う体制の整備を更に進め，一人ひとりの障害のある児童生徒の一貫した「個別の教育支援計画」を策定することについて積極的に検討を進めていく必要があると述べている。軽度発達障害の特徴をもつ『気になる子ども』が増えていると感じる保育者が増加している今，乳幼児期，学童期，就労と継続して障害をもつ子どもとその周辺の人々を支援できるシステム作りが早急な課題であると考えられる。

本論文の一部は，第52回日本小児保健学会総会（下関，2005）において発表した。

文　献

1) 本保恭子，南原リツ子．わが国の障害児・者に対する意識調査の動向―主に統合教育・共生の観点から―．ノートルダム清心女子大学紀要 生活経営学・児童学・食品栄養学編　2000；24：1-11.
2) 位頭義仁．軽度発達障害児の統合教育に関する研究．鳴門教育大学研究紀要（教育科学編）1991；6：1-22.
3) 本郷一夫，澤江幸則，鈴木智子，他．保育所における「気になる」子どもの行動特徴と保護者の対応に関する調査研究．発達障害研究 2003；25：50-60.
4) 平澤紀子，藤原義博，山根正夫．保育所・園における「気になる・困っている行動」を示す子どもに関する調査研究―障害群からみた該当児の実態と保育者の対応および受けている支援から―．発達障害研究　2005；26；256-266.
5) 中西仁志，藤田久美，林　隆，他．幼稚園および保育園における落ち着きのない子どもの困難性と対応について．小児保健研究　2005；64：26-32.
6) 文部科学省．「通常の学級に在籍する特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する全国実態調査」調査結果，2002.
7) 竹田契一，山下　光．軽度発達障害とその幼児期の特徴　高機能広汎性障害・ADHD・LD・軽度知的障害．発達　2004．97：6-12.
8) 橋本俊顕．軽度の発達障害；概論．小枝達也編．ADHD，LD，HFPDD，軽度MR児　保健指導マニュアル　ちょっと『気になる子ども』たちへの贈り物．初版6刷．東京：診断と治療社，2002：8-15.
9) 根来あゆみ，山下　光．軽度発達障害児の主観的育てにくさ感　母親への質問紙調査による検討．発達　2004．97：13-18.
10) 宮本信也，軽度発達障害の子どもたち．下司昌一編．現場で役立つ特別支援教育ハンドブック．第1版．東京：日本文化科学社，2005：17-36.
11) 文部科学省．今後の特別支援教育の在り方について（最終報告）．（オンライン），入手先〈http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/018/toushin/030301.htm 2003〉．（参照 2007.4.1）

Presented by Medical*Online